

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村，哲、ペシャワール会 編著

アフガニスタンからの発言 中村哲
(2/4、2002年)

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告，pp.35-71，2004-05．石風社
バージョン：初版 2004-05-31

権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

「援助の論理」を憂う

今年（二〇〇二年）一月八日、私は再びアフガニスタンの大地を踏んだ。昨年（二〇〇一年）九月一日の同時多発テロと、米軍などによるアフガン空爆による退避勧告以来、四ヶ月ぶりのアフガンだった。

パキスタンと国境の町トルハムは意外に平静で、変わったことといえば、ターバンを巻いたタリバン兵が、新政権の迷彩服姿の軍民に代わったことぐらいであった。私たちペシャワール会の診療所があるグラエ・ヌールでは空爆の影響はほとんどなく、何事もなかったかのように現地スタッフによって作業が進められていた。

以来、私は頻繁に現地と日本を往復しているが、心配された水も、この冬はここ二、三年では

もつとも雪が降り、川の水も増えている。涸れ井戸が復活したところもある。それでも早魃^{かんばつ}の被害が甚大で、とても農作業どころではないというところも多く、まだまだ安心できる状況ではないが、昨年よりは好転の兆しが見える。

昨年（二〇〇一年）一〇月、冬の到来を目前にして、私たちは「ともかく一人も餓死者を出してはならない」と決意し、緊急食糧支援を開始した。

これまでにカーブルやジャラバードの被災民を中心に配った小麦は合計一四〇〇トン。北部同盟がカーブルを占領したのは、そのうち一〇五〇トンを配り終えたころだった。「アフガンいのちの基金」に寄せられた真心の浄財は七億六五〇〇万円にものぼり、それによって少なくとも私たちがカバーした地域では餓死者を出さずにすんだのである。厚く御礼申し上げたい。

さて、タリバン政権崩壊後のアフガニスタンだが、一言でいうと、報道が伝える印象とは逆にいろいろな面でタリバン政権当時より状況が悪化していると考えて差しつかえない。治安が悪くなり、モラルのうえでも怪しげなビデオが出回り始め、ケシ（アヘン＝麻薬）の栽培も増えている。役人の賄賂や横暴も以前に比べてかなり目立つようになっていて。

さらに驚くのは、首都カーブルの人口が昨年秋に比べて二倍近くに膨れ上がっていることである。地方の人たちは、もう食べていけないという状況になると親戚を頼って大都市に移動する。

カーブルの膨張ぶりからすると、この冬、私たちの知らないところで命を落とした人も少なくなっているであろう。

いまそのカーブを直撃しているのが物価高である。一つには人口が急激に増えたため、もう一つはNGO（非政府組織）や国連機関、報道関係者などが一挙に押し寄せてきたためである。たとえば、私たちが一年前に事務所として月二五〇ドルで借りた家の家賃がいまでは月三千ドルにもなり、そのために私たちは事務所を転々と変えなければならなかった。物価が上がれば庶民の生活が苦しくなるのは目に見えている。

三年間続いた早魃のためにアフガニスタン全体で家畜の九割が死に、遊放民が壊滅的な打撃を受けたといわれるが、農家にしても家畜がなければ耕作できない。そうすると、食べていくための手っ取り早い手段はケシの栽培ということになる。

矛盾した話だが、援助の手が入れば入るほど現金生活の比重が増してくる。地域地域で自給自足が完結している、というのがアフガン農村の特質であり、社会を根底から支えてきた。その崩壊が見え始め、その傾向は援助によってさらに加速しつつあると思える。

事実、外国人にはなかなかわからないが、アフガン東部で見るかぎり、昔のほうがかつたのではないかという気分が少しずつ広がり始めている。暫定行政機構が治めているのは、いまはまだ点と線であり、行政機構内部にもいろいろなトラブルがあることから、中産階級やインテリはまだ様子見で、一般の人々は心から従う気にはなれないというのが本音であろう。

そうした気分をさらに強めているのが、いまだに続いている米軍による空爆である。

これを歓迎している人は、特権階級は別として、庶民のなかには一人としていない。「なぜわ

れわれの国を攻撃するののか」。大きな声でいわないだけで、皆そう思っている。

あまり報道されていないが、米軍が落としたクラスター型爆弾は地雷よりたちが悪い。地上に落ちて、それが飛び散って爆発する。子供が持ち帰って家で爆発する。ペシャワール会の現地スタッフが確認しただけでも、ジャララバードを中心としたわずか数十万人の地域での死者が二百数十人。負傷者は数知れない。

タリバンというのは、いつてみればアフガン農村のエッセンスのような政治勢力であった。その意味では潰そうと思っても潰しようがないわけで、形を変え、名前を変えて、再び出てくる可能性は十分にある。

パキスタン側でも、当面の危機はムシャラフ大統領の政治力によって乗り越えたとはいえ、「外国の武器とカネで国を売った」という批判が根強い。そういう人たちが反政府的な動きをしており、再び旧タリバン系の人たちと連動することも考えられなくはない。

ニューヨークのテロで亡くなった人々への追悼は世界中で行われている。しかし、アフガニスタンへの空爆で亡くなった人々に対する哀悼がどこかの国で行われたという話は聞かない。飢えをかかえながら、空爆下を逃げ惑い、肉親を亡くした多くの人たちが、テロリスト予備軍にならないという保証はどこにもないのである。

アフガニスタンというのは、もともと統一された行政機構が全国をきっちり管理するというスタイルの国ではなかった。いわば地域地域で伝統的自治が確立されており、そのうえに一応、統

治者らしきものが君臨していたにすぎない。

いま行われている援助というのは、そういう国に日本や欧米諸国のようなモデルをつくらうとする試みだといえる。現地から見れば、壮大かつ愚かな作業である。

アフガン人にはアフガン人の生き方がある。自分たちの価値観を押しつけ、それによってアフガニスタンを「再生」させることがアフガニスタンの人々を幸せにする道だと信じている人がいるが、昔のものを取り除かなければ進んだ国にならないといわんばかりの援助のあり方が、はたして正しいのかどうか。そういうと、「おまえは原理主義者と通じているのか」といわれそうだが、それ自身が偏見だ。アフガニスタンの一般の人々も同じ気持ちだと思う。

その端的な例が「教育」である。アフガニスタンの伝統的な文学は口承文学であり、有名な詩人で文字の書けない人も実際にいる。アフガニスタンは識字率が低いというが、文字が読める、読めないということがそのまま文化的進度の尺度になるのだろうか。

英語をしゃべれる人が優れているわけではないし、読み書きができる民族がえらいのかというと、そんなことはないはずである。

三十数年前のザヒル・シャー元国王時代、西洋的な国民教育を普及しようとして、軍隊を動員させて無理やり学校に行かせ、そのため各地で反乱が起きたことがあった。昔のままが悪いのかというと、必ずしもそうとはいえないのではないかという気がする。

教育というのは、何のためにあるのか。大きな柱は二つあると思う。生活していくための「技

術の習得」と、人間としての徳というか、修養を積む「人間教育」である。

生活していくための教育であれば、圧倒的に多い農民、遊放民の子弟にとっては、家の手伝いをするのがそのまま技術教育になる。人間教育の面からいえば、金曜日ごとにモスク（イスラム教の礼拝所）に行き、一日五回のお祈りをして、人間として、＼していいこと＼と＼してはいけないこと＼の分別を身につけることこそ立派な人間教育となりうる。そういうことまで変える必要はたしてあるのか、というのが私の素朴な疑問である。

私たちが子供のころは、家の手伝いをすればほめられたものだった。それを「小児労働」と称して、子供が働くことを否定するような思想が健全なものとは思えない。地縁・血縁社会であるアフガニスタンでは、家族や親戚が困っていれば、子供も大人も皆で助け合うのが当然な姿である。

女性の人権ということで、女性がブルカ（目の部分だけをあけ、全身をおおう外出着）を脱ぐことを近代化の象徴のようにいうのも甚しいのはずれだ。そもそもブルカというのは、パキスタンのペシャワールでもそうだが、ほとんどの農村における女性の伝統的外出着である。ブルカを着せられて、女性の人権が侵害されているというのは、日本女性の着物の帯を見て、あんなに体が締めつけられているのは可哀相だ、解放してあげなくては、という類いのよけいなおせっかいなのである。

テレビで盛んに報道された女性のための「隠れ学校」も、禁じられていたのなら、カーブルだ

けで数十ヶ所もあったその存在が、ばれないはずがない。女性のための教育は実際にはこれまでもユニセフ（国連児童基金）を中心に行われていたのである。これはタリバンにも表の顔と裏の顔があり、本音の部分があまりにも知られていなかったという問題にはかならない。

タリバン政権が禁じていた風揚げができるようになったといつて、子供が風揚げをしている風景を放映していたテレビにいたっては話にもならない。風揚げは以前からアフガン中で行われていた。

こうしてみると、メディアというものがいかに一方的、一面的で、「わかりやすい筋書きの作り話」をたれ流すものであるかよくわかる。

援助を決める国際会議もあまりにもきれいごとが多すぎる。今年（二〇〇二年）一月、東京で開催された「アフガン復興支援会議」にしても、結局はおカネの勘定で終わってしまった。それどころか、援助項目を決めたのは有害でさえあった。いったん援助項目が決められてしまうと、それに拘束されて、現地の人たちが必要としていることでも項目に入っていないということで動きづらくなるからである。さらに、あの会議が、「これで何もかも解決した。あとは復興だ」というような、なんとなくアフガニスタンの問題にピリオドが打たれたような感じを世界に与えたことは、私は大きなマイナスだったと思う。

NGO（非政府組織）についていうと、名前は連ねていても、実際にはそれほど活動していない団体があまりにも多い。私たちは一時、五ヶ所あるカーブルの診療所の閉鎖を考えたことが

あった。カーブル陥落後、NGOの活動が始まればほとんどが目立つカーブルに集中するだろう。カーブルが「NGO銀座」になるのなら私たちがいる必要はない。その力を本来の活動の場である農村に向けよう、と考えたのである。

ところが、入ってきたNGOには、宣伝のわりにはそれに見合った活動が見られない。そのために私たちは住民の強い要望で、いまでも市内三ヶ所で活動が続けざるをえないでいる。

NGOは、日本では「正義の見方」のように思われているが、アフガニスタンではやや軽蔑の対象になっている。一つには、NGO自体が一つの企業体になっており、「彼らはあれで食っているのだ」と見られているからである。もう一つは、援助が片寄り、その恩恵が一部にしか及ばないということが、過去、数えきれないくらいあったからである。

もう一つ、日本人が知らなければならないのは米国への軍事協力である。アフガニスタンの人々が日本に対して非常に友好的であることはこれまでもふれた。幸いなことに、今回の自衛隊の出勤についてはいまのところ現地では大きく報じられておらず、それで助かっている面もあるが、もし報じられれば、日本に対する信用はガタ落ちになるだろう。心配なのは、カーブルの治安維持のために出勤している多国籍軍の有力メンバーがトルコ軍であることから、日本政府がトルコ政府を通じて多国籍軍を支援するという話が現実化しつつあることである。これは由々しい問題をはらんでいる。そうすると、テロ対策どころか、日本はテロの危険を身近に引き寄せることになるだろう。

アフガニスタンの立国の基礎は農業であり、アーモンド、クルミ、柑橘類の巨大な輸出国になっている。オレンジもオリーブもできるし、スイカもザクロもブドウもおいしい。アフガニスタンの人々のためには、基本的には数千年の歴史のなかでそれなりにでき上がった伝統的な農村社会を基盤に、多少のゴタゴタはあっても、緩やかなまとまりをつくっていくというのがいちばん幸せな道であろう。

アフガニスタンの将来はアフガン人自身が決めるべきであり、自分たちの選択によって変わっていくのならともかく、そういう伝統的なかたちを無理強いして変えるのは余計なお世話である。「選挙制度がない」というが、われわれが考えているような国家がアフガニスタンに必要などうかである。そういうと反論があるかもしれないが、医者としてアフガニスタンに入って一八年、正直、私はそう思う。われわれは先進国なのだから、進んだものを与え、教えて、役に立ちたい、というのは思いうがりも甚しいと思っている。したがって、私たちペシャワール会の活動の基本方針が、彼らのやり方を手助けすることであることは今後とも変わらない。

具体的には、第一に、その地域の人々が生活してきた生活基盤を復活させることである。いま井戸掘りの作業地は八〇〇ヶ所以上になり、そのうち六百数十ヶ所で水が使えるようになっていく。それをさらに拡大していけば、住民たちは村を離れずにすむ。

第二に、医療活動については、いま私たちはペシャワールにある七〇床の基地病院を中心に、アフガニスタンに六ヶ所、パキスタンに二ヶ所診療所をもっているが、その診療所を建て替える

などして質を向上させ、予防的な医療を取り入れながら、さらに現地に定着していきたいと思っている。また、いますぐにというわけにはいかないが、情勢が落ち着いてくれば診療所を増やしたいとも考えている。

最後に、この半年間を振り返って危惧するのは、結局はアフガニスタンを空爆したのと同じ論理の援助がいま行われているのではないかということである。あそこには危険な勢力がある。それを潰してしまえという筋書きが作られ、その通りにことが運ばれつつあるように思われてならない。その意味では、いま行われている復興支援も本質的には空爆とそう変わらない。この不寛容と尊大さは、非西欧世界にとって危険な兆候である。

(2002・7)

破壊と援助の連鎖

四年目に入ったアフガニスタンの大旱魃^{かんぼつ}は、多少の積雪の増加によって、やや緩和の兆しが見られたが、本格的なものではない。半砂漠状態の地域では、依然として深刻な状態が続いている。PMS（ペシャワール会医療サービス）では、二〇〇〇年七月から必死の対策を続けてきたが、やっと東部をカバーするのが限界である。

皮肉にも、二〇〇一年一〇月の米英の空爆開始で、やっと惨状が認識されるようになったが、再び政治的関心の薄れと共に忘れ去られようとしている。現在、日本を筆頭に「アフガン復興」が進められようとしているものの、まだまだ調査段階が多く、実働していない。各国政府、各国NGO共に、現在のところ存在を誇示するに留まっているようである。人々の間では失望感が広

がっている。

タリバン崩壊後のアフガニスタンは無秩序に覆われ、事態は一九九二年の社会主義政権倒壊直後に戻った。首都カーブルだけが、かろうじて多国籍軍の存在で治安を維持している状態である。パキスタン政府、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の協力で、確かにアフガン難民は帰郷し始めているが、現在の状態では帰っても職がなく、旱魃被害の広がる農村地帯の国内避難民は数を増すばかりである。カーブルに殺到した国際団体によって、異常な物価高騰が起き、庶民はますます苦境に立たされている。アフガン復興の中核となるべき中産階級がペシワールを動く気配は、今のところない。

タリバン政権の崩壊は、取り返しのかね無秩序と、人々の苦境を生み出したといえる。「解放」されたのは、麻薬栽培の自由、餓死の自由、アフガン人が誇りを失う自由である。今後「アフガン問題」への関心は急速に薄れるが、国際社会は一連の出来事の根底から読み取れる地球規模の破局に気づいているとはいえない。将来、再び「アフガニスタン」が話題になるとき、自らの足許に及ぶ厄災を知ることになるだろう。

この中であればこそ、われわれはこれまでと少しも変わらず、事業を継続する。過去の破壊と援助の繰り返しを見てきた人々は、もはや外国人も政治家も信じない。ただ自らの生命を自らの手で守ることに必死であろう。ペシワール会の歩みは、国際的関心の有無とは全く無関係である。ひたすら現地の人々と共に笑い、人々と共に泣き、僅かでも希望を共にする存在である。文

字通り国境を越え、まごころのこもった支援をいただいた日本や韓国の人々に感謝すると同時に、
今後もその厚意を生かし、この事業によってわれわれ自身も希望を共にするものでありたい。

(2002・4・26)

復興という名の破壊

「もう、これくらいで放置していただきたい」というのが、一言で述べ得る感想である。現在のアフガニスタンの状況は、大の大人が寄つてたかつて、瀕死の幼な子を殴ったり撫でたりしているのに似ている。この一年間、私たちにとって成果と言えるものは、「情報化社会」が必ずしも正しい事実を知らせず、むしろ、世界中に錯覚をふりまいて、私たちが振り回されることになるのを身にしみて知ったことである。無理が通れば道理が引つ込む。世界を支配するのは、今やカネと暴力である。

架空の土俵でまともな論議が成り立たないが、敢えて今の樂觀的な復興ムードに水を差したいのは、現在の援助の構図自身が、「先進国社会」の病理と、行き詰まりを映し出しているからで

ある。

現実が伝わりにくいのは理由がある。私たちが事実を素直に見る眼を失って、独善的な世界に住んでいるからだ。密閉された情報空間で、話題性のみに振り回され、虚像が実像と混同されるのは恐ろしい。空爆や対テロ戦争と同じ論理で、復興支援のシナリオがまかりとおる。「遅れて貧しい人々を助けたい。その進歩発達を阻んでいた『圧制』から解放され、自由と民主主義もたらされようとしている。この復興に力を貸すのだ」というのが大方の考えだろう。しかし、これは完全な錯覚である。文明の名において、ひとつの国を外国人が破壊し、外国人が建設する。そこに一つの傲慢が潜んでいないだろうか。

昨年九月、米軍の空爆を「やむを得ない」と支持したのは、他ならぬ大多数の日本国民であった。戦争行為に反対することさえ、「政治的に偏っている」と取られ、脅迫まがいの「忠告」があったのは忘れがたい。以後私は、日本人であることの誇りを失ってしまった。「何のカンと言ったって、米国を怒らせては都合が悪い」というのが共通した国民の合意のようであった。

だが、人として、して良い事と悪い事がある。人として失ってはならぬ誇りというものがある。日本は明らかに曲がり角にさしかかっている。日本の豊かさは国民の勤勉さだけによるのではない。日本経済が戦争特需によって復興し、富と繁栄を築いた事実を想起せざるを得ない。そして、富を得れば守らねばなくなる。華美な生活もしいが、命も惜しいという虫のよい話はない。殺戮行為を是認してまで華美な生活を守るのか、貧しくとも堂々と胸を張って生きるかの選択が

迫られていたといえる。「対テロ戦争」は何を守るのか。少なくとも命を守るものではなさそうである。

未来を予測するのは、いくぶん怖ろしい。「アフガニスタン」は何かの終局の始まりを暗示している。それが何なのか、一介の医者が述べるには分際を越えるが、レミングの群の死の行進でないことを祈る。強調したいのは、世の流れから超然と、醒めた目で現実を見透し、我々自身の行方を真剣に考える時期が到来したということである。時流に乗せられて「不安の運動」に身を委ねてはならない。私たちのささやかな活動に意味があるとすれば、世界の片隅で起きた出来事の真実を伝え、いのちへのいたわりを思い起こし、以って吾が身を省るよすがとすることであろう。

* *

二〇〇一年度はベシヤワール会が始まって一八年目、最も激しくゆれた年であった。アフガニスタンの未曾有の早魃^{かんばつ}は収まらず、国際社会の圧力でアフガニスタンは孤立していた。既に二〇〇〇年五月、WHO（世界保健機関）は、繰り返し「アフガニスタン大旱魃」の危機を訴え、被災者一二〇〇万人、飢餓に直面する者四〇〇万人以上、餓死線上にある者一〇〇万人以上と発表していたが、国際的な注意を喚起できなかった。

二〇〇一年一月には、国際救援どころか、国連制裁が発動され、外国のプロジェクトは殆どが引き上げられた。飢餓難民が首都カーブルにあふれ、旱魃地帯の農民たちは続々と村を放棄して

難民化していた。東部の限られた地区ではあったが、私たちPMS（ペシャワール会医療サービ
ス）は、砂漠化が進行する中、飲料水確保に全力を挙げ、かつ医療活動もかつてなく広大な地区
をカバーせざるを得なかった。

政治的には、旧タリバン政権が国土統一を進め、全土の九割を掌握、北部の戦闘地区を除けば、
大旱魃にもかかわらず、過去最も治安が安定していた時期であった。北部の軍閥（マスード、ド
スタムら）は、かろうじて外国の武器援助で命脈を保っていたのである。もともとタリバン勢力
は東部・南部のパシュトゥン部族と親和性が強く、それもアフガン農村社会を基盤とするもので
あったから、西欧化した都市中産階級には受けが悪かった。だが、アフガニスタンの九割が農民
か遊牧民であることを考えると、農民や都市貧困層の間では、さして嫌われていたわけではない。
それどころか、タリバン政権の基盤は、各地域の伝統的自治組織ジルガ（長老会）の支持だった
のである。かくて、報道と情報の偏りが「極悪非道の狂信的集団・タリバン」という虚像を作り
上げ、「人権」活動家の格好の標的となった。

九月一日のニューヨークのテロ事件によって国際社会は、衝撃のあまり、短絡的な「アフガ
ン空爆リタリバン殲滅」という米英の軍事政策に引きずられた。この恐るべき情報統制による影
響については言及しないが、結末は悲劇的であった。六千名の死傷者だけでなく、冬季に移動で
きぬために餓死に直面した者がどれだけいたか、ただその膨大な数に戦慄しながら想像をめぐら
すのみである。

一一月にカーブルが陥落すると、たちまち無政府状態が現出した。タリバンは秩序正しく短期間に姿を消した。逮捕されていた外国人ジャーナリストや宣教師団体の者も、律儀にトルハム国境まで無事に送り返された。その規律は驚嘆すべきだった。その後ニュースを賑わせた派手な空爆や「掃討作戦」の成果のほどは分らない。カーブルにはISAF（国際治安支援部隊）が進駐し、かろうじて点と線の治安を維持している。二〇〇二年一月東京で開かれた「アフガン復興支援会議」では、「自由とデモクラシーによって解放されたアフガンの再建」というシナリオが希望をふりまいたが、現実とは安定から程遠いものであった。

パキスタンもまた、米英の圧力に屈し、辛くも国家分裂の危機を切り抜けたが、二〇〇二年五月、カシミール問題をめぐって、対インド関係が核戦争の危機を孕むまでに緊張した。パキスタン民衆の心情は宗教感情を背景にますます先鋭化していると云えよう。アフガン国境のパシクトゥン人自治区では、米軍の直接軍事活動が拡大するにつれ、反米感情がますます高まっている。これと同時に起きた「アフガン復興援助ラッシュ」が破壊的に作用して、庶民の生活を圧迫している。すなわち大方のNGO（非政府組織）がカーブルに殺到し、異常な物価高騰を招いた上に、主にパキスタン側（ペシャワール）から半ば強制的に行われた「難民帰還計画」が六月一五日までに一〇〇万人に達したからである。彼らはもともと早魃から逃れてきた出稼ぎ難民が殆どであったから、荒廃した故郷に帰れず、カーブルなどの大都市にあふれた。この不自然で急激な人口増加が需給のバランスを一挙に壊し、物価高騰を招いた。UNHCR（国連難民高等弁務官

事務所）自身が、率直に「早すぎた難民帰還」を認めている。

六月一〇日に始まったロヤ・ジルガ（国民大会議）では、米英の推すカルザイ政権が認知されたと伝えられたが、事はそれほど簡単なものではない。米英の軍事プレゼンスが去れば、政権は確実に危うくなる。国軍が創設されれば、その国軍が反旗を翻すことも起りうる。現在のところ、戦に厭きたアフガン民衆は沈黙しているが、先行きの不透明さを皆が感じている。英軍でさえ撤退の兆しを見せている。アフガン復興はいばらの道だと言わざるを得ない。

(2002・7・10)

オキナワからアフガニスタンへ

沖縄平和賞受賞によせて

今回の受賞にあたり、まず過分のご評価に感謝申し上げます。戦乱の中に平和を追い求めるのは決して容易ではありません。昨今の日本の風潮も「対テロ戦争やむなし」という論調でぬりつぶされ、アフガニスタンで医療活動や水源確保事業を続けるペシヤワール会も誤解や不審の目で見られたことがあります。

私たちのアフガニスタンでの長期の活動は、日本の心ある人々の異例ともいえる支持を受けましたが、それでも日本全体の平和への願い、独立した平和国家の誇りを本当に保ちえたかといえ、心もとないものがあると言わざるを得ません。そういう中で私たちの活動を「非暴力による平和への貢献」として沖縄県民の皆さまが認めて下さったことは、特別に意味のあることだと受

け止めております。

遠いアフガニスタンでの活動と、アフガニスタンに出撃する米軍基地を抱える沖縄、このコントラストは、現場にいる私たちには圧倒的であります。平和をとなえることさえ、暴力的制裁を受ける厳しい現地の状況の中で物言えない人たちの声、その奪われた平和の声を「基地の島・オキナワ」が代弁するのは、現地にいる日本人として名誉であります。

私たちの活動しておりますアフガニスタンやパキスタンでは、対米協力しないと餓え死にか、国がなくなるかという選択を強制されているのが実情だといえます。何千人もの人が空爆で死に、何万人もがそれに伴う飢餓で死にました。

沖縄の抱える矛盾、これは凝縮された日本の矛盾でもあります。米軍に協力する姿勢を見せないときき延びられないという実情は、実はかの地でも同じです。基地を抱える沖縄の苦悩は、実は全アジア世界の縮図でもあることをぜひお伝えしたいと思います。

今回の平和賞は、人としての誇りを失いがちな世界に一矢を報いるものであります。平和賞をめぐる議論があることも私たちは承知しております。しかし、平和とは少なくとも沖縄においては、政治的立場を超えて、全県民が切実な思いで求めておられるものと確信しております。

幾百万、幾千万のアジアの同胞の犠牲の上に「平和日本」が高らかにうたわれたのはほんの六〇年前でした。しかし、今その教訓が風化しているという現実があります。命の大切さに、民族や国境の垣根はありません。確かにいま、私たちに即席の解決というのは難しいでしょう。それ

でも、私たちは次の世代に向けて平和への願いを真摯に訴え続け、やがて力となる流れと、希望を生むことはできると思います。

平和賞で贈られた浄財は、アフガン東部ドラエ・ピーチに建設中の診療所に使わせていただき、これを「オキナワ・ピース・クリニック」と名付け、戦乱の地にあえて平和の礎を築くのであります。

暴力によって立つ者が暴力によって減びることは、人類史上の鉄則であります。私たちに贈られた平和賞が、この一歩として未来に力を持つことを祈るものであります。

(2002・8・31)

戦禍の大地に緑と平和を

みなさん、お元気ですか。

二週間前にアフガニスタンから帰り、この一年の出来事を振り返りながら、静かに今後のことを考えています。「今後のこと」と言っても、本質的にはこれまで通りなのですが、アフガン空爆以後のめまぐるしい内外の情勢に振りまわされ、めまいから立ち直りかけているところです。

ある程度予期していたとはいえ、昨年九月以後の動きは、私たちに能力以上の努力を強いてきました。まるで一〇年の時が流れたかのように思われます。本当にさまざまなことを改めて学ばれました。しかし、その多くはこれまで見聞きし、感じたことの再確認でありました。

世界には現実の虚像しか伝わらないこと、人間はどうしようもなく愚劣であって、自分の中で

作り上げた小世界に基づいてしか生きてゆけないこと、傲慢と暴力、目先の豊かさとカネが世界を破壊しつつあること。そして、この自己破壊的な愚かさ、今や最終局面に近づいていること……様々なことを心に巡らしました。

とはいえ、日本側ペシャワール会・現地側PMS（ペシャワール会医療サービス）双方の奮闘は、これまでになく目覚ましいものがありました。事務局は一桁異なる事務量をこなさねばならなかったし、現地は現地で、訪問者やワーカーが増加、仕事の質量共に膨大となり、多大の努力を強いることになりました。と言っても、決して日本人だけが活躍しているわけではありません。損得を抜きに、時には身を危険にさらしながら行われたアフガン人とパキスタン人の協力、実は彼らが主力なのです。現地では、昨年にも増して拡大する長期事業に備え、大きな構造的な変化を経過しています。ここに「緑の大地計画」の一端を伝え、会員各位のご理解を得たいと存じます。案の定、アフガン報道は次第に遠のきつつあります。あれだけ世界を騒がせ、よく観れば多くの知恵をもたらしたに違いない「アフガニスタン」は、未消化のまま、忘れ去られてゆくであります。しょう。それでも、幸いなことに、ペシャワール会は多くの理解者を獲得して、二〇〇二年一〇月現在会員一万一千名、募金は一年で一〇億円に迫り、次のステップを大きく踏み出しました。具体的には、「緑の大地計画」に着手し、問題解決の範を示すべく、今後一五年を目処に歩み始めました。医療活動はこれまでどおり実施されますが、これに水源・農業が長期取り組み事業として加わりました。

目立たないけれども重要な出来事として、人事刷新がありました。現地事業は、これまででさえ、私一人では到底、成り立ちませんでした。地域、分野共にさらに拡大したこの二年間は、特にそうでした。そこで今年四月から、PMS（ペンシャワール会医療サービス）病院長代理に、現地一二年の経歴をもつ藤田千代子看護長が就任し、誠実かつ勇敢なイクラムラ事務長、ジア副院長がこれを補佐する形で、現地PMSの要が固められました。ジャラバード水事業では、ややもすれば分離割拠しやすい弊風を克服して、臨時態勢から長期態勢へと脱皮しました。今春以来、嵐のような国際援助ラッシュがカーブルに集中し、高給に惹かれてPMSを去った職員は、医療関係二九名、水関係一六名に上りました。私たちとしては、これは人を見る良い機会だとして静観し、現在残った者でおもむろに態勢を立て直しています。この結果、PMS職員は、医療関係一八〇名、水関係九五名に減りましたが、機能は充実しています。ジャラバード事務所は、七月より目黒丞を院長補佐とし、ディグール技師を技術的指揮者として、再編成されました。日本人ワーカーも増員されました。一月からわずか一〇ヶ月の間に、十数名が来ています。ただし、慣れるのに時間がかかるので、一年以上を受け入れ、三ヶ月間は様子を観察して決めるという方式を徹底し、「ボランティア」という名前を廃止しました。世に流行る安直な印象を払拭（ふっしょく）するためです。

医療関係では、カーブルの五つの臨時診療所を六月に閉鎖、アフガン東部に集中するようにしました。これは「援助ラッシュ」がカーブルに殺到したこと、事業の拡散で疲弊したPMSを立

て直すためでした。また、アフガン内診療所の新築にとりかかり、分けても現在米軍が集結しているクナール州のグラエ・ピーチでは、沖縄県民の厚意と共感を生かし、住民たちと協力、「オキナワ平和診療所」(第一回沖縄平和賞の浄財が建築費にあてられる)として強化されようとしています。「江戸の敵を長崎で討つ」ではありませんが、彼らの暴力主義と前線で対峙することになります。土俵はこちらのものですから、邪魔さえなければ、遅くとも来春までに完成の見通しです。

飲料水の方は、最も早魃かんばつの被害が甚しかったニングラハル州に限定、今も変わらずに作業が継続されています。九月三〇日現在、総作業地八五四、うち利用可能な水源を得たもの七七四、一見作業地数の伸びは鈍っていますが、内容は充実しており、最深七八メートルの手掘り井戸が記録を更新しました。しかも下がる一方の水位との戦い、カーブルのNGO(非政府組織)ラッシュで人材が引き抜かれ、虎(米軍)の威を借る軍閥の脅迫、無政府状態の中です。加えて、例によって陰謀、内紛、裏切りと、一時はPMSのジャララバード事務所は分解のふちまで立たされました。しかし、ペシャワールPMS基地病院の大幅なテコ入れで、人事を全面刷新、改革を断行してよく立ち直り、必死の作業が続けられています。

さらに重要なのは灌漑用水の獲得です。最初に私たちの診療所が置かれたグラエ・ヌール溪谷では、これをモデル地区とし、早魃被害で砂漠化した下流域を中心に、灌漑用水の確保、農業生産を上げる試みが始まりました。昨年すでに三〇のカレーズ(灌漑用地下水路)の再生によって、

中流域の村々（約一万五千人）が辛うじて生き残ることができました。だが、下流の村（ソレジ村、ブディアライ村）は砂漠化のため壊滅、ほぼ無人化していたところ、約八千名の「帰還難民」が戻ってきました。いや、国際機関の早計な帰還計画によって「戻されてきた」という方が精確でしょう。この途方にくれる帰還難民に希望を与えたのが、我々の手がけた「大口径・灌漑用井戸」です。昨年六月に着手していましたが、今年七月になってやっと給水を始めました。少し長くなりますが、説明が要ります。

「灌漑用井戸」などと述べれば、おそらく大方の日本人は、大農園のボーリング井戸を想像されるでしょう。しかし、そんな大それた機材を搬入することも、維持することも難しい地域です。私が途方にくれて思案していたのが一昨年の話。村から一キロメートルほど向こうにクナル河という大河が流れています。村はこの川の水位から約三〇〜四〇メートル高いところにあるので、川床の水が豊富なら強力な水圧がある筈だ。その深さまで掘り進めば、必ずや水を得るだろう。器械がなければ、手で掘って、人力で汲み上げればよい。専門家筋は笑うであろうが、それ以外にないなら、窮余の策でやるべきだ……との判断で始めたのです。

しかし、ガラエ・ヌールに貼りつけになる日本人担当者が居ず、この計画はしばらく私の夢に出るだけでした。そこに、一昨年一二月、現責任者の目黒氏が専従で来ました。しばらく放置して様子を見てみると、現場を取り仕切っていた現地出身のPMS職員・ヨセフと仲良くなり、案外地元によく溶け込みました（ちなみに、普通の日本人ワーカーなら、このあたりで頭が変にな

るのですが、彼は我流で現地のパシュトゥー語を覚え、任務を楽しくこなしていました。PMSは他のNGOと異なって、手とり足取りのガイダンスをしません。地元の言葉で言えば、「神の思し召しによって」目黒という人物が来たのです。そこで、昨年六月、彼とヨセフの監督の下、思い切って開始させたのでした。

作業は空爆下も続けられ、昨年一〇月に水が出ました。だが、問題はいかに水深をとるかでした。飲料井戸の掘削に使う排水ポンプでは間に合いません。地面が現れる前に、すぐに水が溢れてくるので、掘り進めないのです。それほど水量が多かったのです。これを考えたのは、素人のヨセフでした。「大きなポンプが手に入らないなら、ポンプを四台か五台で、一度にやったら」との意見でしたが、自分を専門家と知っている人々は笑いました。しかし、目黒氏が彼を支持してポンプを調達し、四台を備えて一気に汲み出すことができ、掘り進みました。これで水深を充分にとることが出来たのです。

かくて苦心惨憺、出来上がったものが、直径五メートルの手掘り大井戸。深さ一八・七、水位四・五メートル。要するに、井戸のお化けです。掘り出した土と巨岩で、要塞ができるほどの小山となりました。

「上空から見れば、おそらくミサイルの発射口か地下壕の入り口に見えるだろう、よく米軍が爆撃しなかったものだ」。

「いやなに、上手く井戸底の真ん中に命中すれば、巨礫粉碎の作業の手間が省けたかもしれない

いぞ」などと冗談を言い合いました。

実際には、川床の水位に達する前に、上層の地下水脈に達したのですが、これは大成功でした。常時貯水量が三〇トン足らずですが、水の湧出する面積が一〇八平方メートル、汲んでも汲んでも湧き出てきます。排水をした直後に底に降り立つと、「岩清水」という言葉がぴったりの透明な水が、四方八方の巨岩の壁のすきまから流れ落ちていきます。上から見ると、「これが水の色か」と思える見事なコバルト・ブルーです。相当な水量であることは間違いないささうです。結局、目黒氏と地元技師ディグルとの発案で、強力かつ石油消費の少ない単純構造のタービン・ポンプを取り付け、給水が始まりました。この一基の井戸で灌漑できる面積が約二〇ヘクタール（二〇町）、小麦やトウモロコシなどの乾燥に強い作物なら千数百人を養うことができます。

七月の給水開始以来、その成果のほどは目を見張るものがありました。九月二〇日、私が訪れた頃には、三ヶ月前まで一木一草なかったひび割れた田畑に、見渡す限り緑が広がっているではありませんか。この季節は主に綿とトウモロコシが作付けされます。農業担当の橋本氏が診療所で試験農場の収穫祭を祝った後でしたが、なにしろ村人たちが絶望する中で得られた天からの贈り物です。焼きたてのトウモロコシの味は、また格別でした。

すでに六月段階で私の指示に従って、目黒・ヨセフのコンビが他に四ヶ所、次の候補地を選定していました。これは、主食である小麦の作付けが一月なので、何としてもそれに間に合うようにとの配慮でした。七月には第二号が水を出し、九月には第三号も完成間近でした。計五基あ

れば、優に八千名の村人を養える見通しです。かくて冬越しの準備は成りました。

農業と共に、乳牛の導入が検討されていきました。アフガニスタンは乳製品が日常的に食される国です。この日本側担当者が稲田・高橋の両氏です。「長老」というのはまさにこういう方々を言うのでしょうか。共に農業指導員として粘り強く実績を上げてきた方です。一年や二年は時間のうちに入らない。今年駄目なら来年、自然の理に適わねば長い目で見て結局ダメだ、というのが農業です。「ガラエ・ヌール溪谷に乳牛八千頭」と聞いて、「どれくらい（月日）かかりますか」と尋ねると、「上手くいって最低七年かなあ。いや、それ以上」とのご返事、私も納得しました。思えば、牛もまた生物、餌が要るのは当然です。それが数年来の旱魃のため、九割が死滅、辛うじて生き残った牛は、死ぬ前に肉牛として売りとばされました。飼料の問題を無視して「牛を配るプロジェクト」だけ突出できないのです。実際、援助として配られた牛は、大半が売りとばされています。私たちは（１）まず水を出す、（２）農業を可能にして飼料が出来るようにする、（３）これに見合うだけの牛を配布する、という方針で徐々に増産する計画でいます。といえ、
「当たり前前だ」と皆は言いますが、その当たり前でない「復興支援」が行われているので、私たちも困っています。

灌漑用水が整備されるという前提で、高橋・稲田氏が指示された準備は理に適ったものでした。まず飼料を土地に合ったやり方で確保することです。それも、お金をかけず、誰にでも真似できる単純な方法でなければなりません。アフガニスタンでは冬の飼料に、秋とれたトウモロコシの

茎や葉を与えます。しかし、これは栄養価が極めて貧弱だそうです。そのため、乳牛は非常にやせ衰えていて、日本の牛の半分以下しか体重がないそうです。稲田さんの皮算用では、ともに飼育すれば四倍の乳がとれる。自給自足できるだけでなく、他地域に乳製品（チーズ、ヨーグルト）を売ることができると言います。これには私も飛びつきました。栄養失調で次々と死んでゆく子供たちを見てきたからです。

現在、ペシャワール会（PPMS）はこの地域に八千平方メートルの試験農場を持っており、食糧増産のための地味な取り組みが行われています。ここでの課題のひとつが、冬の飼料の確保でした。ソルゴーという、トウモロコシに似た植物が植えられています。これを幾度か刈り取って、簡単なサイレージを行います。つまり、プラスチックのシートでくるんで、地中に入れます。これだけです。すると、何ヶ月かすると内部が醗酵し、牛にとって非常に栄養価の高い食物になるそうです。

こうして現在、ドラエ・ヌール渓谷では、医療から始まって、飲料水、食糧問題に至るまで総合的な取り組みが始まりました。私たちは決して、「アフガニスタンを救援する」などと大きなこととは言いません。その日その日を感じて生きられる、平和な自給自足の農村の回復が望みです。今アフガニスタンでは、確かにカネやモノが不足しています。立派な校舎や病院もあります。自動車もないし、電気ありません。しかし、それが本当に不幸なのでしょうか。彼らが最も切実に望むのは、誰にも依存せぬ村々の回復です。鋏も握っていない外国人が農業支援を行うこと

はできません。カネをばら撒いても、農産物は増えません。また、カネがないとできない農業は、現地にむいていません。さらに、教育の破綻しかけた国が教育支援をするなど、冗談にもほどがあります。現地のことわざに、「アフガニスタンではカネがなくとも食っていける」と言い、「アフガン人に半人前はいない」と言います。これが私たちの合言葉でもあります。精神はカネでは買えません。この独立不羈ふきの氣風がアフガニスタンの屋台骨です。

目先の利にさとく、強い者には媚こび、衆を頼んで弱い者に威丈高いたけだかになるのは、見苦しいことです。自分の身は針でつつかれても飛び上がるが、他人の身は槍で突き殺しても平氣。かつて日本では、こういう者は嫌われました。でもこれが、今風の「国際社会」や「先進諸国」のようです。その武力の強大さは、刃物を持った狂人ともいうべく、とうてい文明人の習うべき姿ではありません。交通や通信手段ばかりが発達しても、伝える中味のない社会は、所詮、浮き草うきくさのように漂うに過ぎません。巧みだが実のない空論や、付和雷同する幼稚な氣風だけが、徒いたずらにはびこるだけです。最近、あるイスラム教国の首相が、「日本は我々の手本でなくなった。反面教師として注目するのみ」と断言しました。これは、真剣に受け止めるべき忠告だと思えます。他人に映る自分の姿はなかなか気づかないものです。

めまぐるしい一年でしたが、かくも容易に世界中が欺あざむかれるとは、思ってもみませんでした。「文明国」のお里が知れ、先がおよそ見えてきたようです。せめて私たちだけでも、騒々しくも軽々しい世の流れに惑わされず、しっかりと二本の足を大地につけ、黙々と歩み続けたいと思っ

戦禍の大地に緑と平和を

て
い
ま
す。
。

(
2
0
0
2
・
10
・
13
)

「緑の大地」を求めて

アフガン空爆とタリバン政権の崩壊から一年が経過した。何から述べてよいかわからない。ただ、対テロ戦争と言う名の国家的暴力による、取り返しのつかぬ結末の中で、人々とおろおろするばかりである。アフガニスタンは過去最悪の状態となっている。

本年開かれた「アフガン復興支援・東京会議」は、空爆と同様、その見直しを迫られている。

帰還難民は十一月現在で一七〇万人と報ぜられたが、その大半が寒風の中で依然として餓死や凍死と隣り合わせに暮らしている。ISAF（国際治安支援部隊）はカーブルにだけとどまり、米軍は増派を余儀なくされ、新政府の整備も遅々として進まない。地方軍閥の抗争は、私たちペシャワール会もPMSの現地事業に多大の影響を与え、新情勢の中でさまざまな困難に直面して

いる。

とはいえ、指をくわえて傍観している訳にはいかない。「緑の大地計画」は、長期的な視野で継続されている。作業地は八八ヶ所（十一月末現在）、年内に九〇〇を超える。これによって、約五〇ヶ村で三五万人が故郷につなぎとめられている。灌漑用井戸の建設、カレーズの再生は、グラエ・ヌール溪谷で計二万人以上の人々の定住を可能にした。

医療面では、六月に復興援助ラッシュを見届けてカーブルから全面撤退し、東部の診療所に力を注いでいるが、苦戦を余儀なくされている。PMS診療所は非パシュトゥンの山岳民族が住む地域が多いが、軍閥同士の抗争によって、奥地まで秩序の弛緩が始まり、ジルガ（長老会）の統制が弱まっているからだ。

また、ペシャワールのPMS基地病院でも、大量のアフガン人職員が他のNGO（非政府組織）、国連事業に高給で引き抜かれ、奥地の診療所勤務は殆ど隔月になっている。その上、追い詰められた住民たちは気がたつてきて、いざこざが絶えず、医療職員は安全性に不安を抱いている。一〇年前と同様、PMS連携の自衛団の組織化さえ考慮せざるを得ない状態である。

しかし、この悪条件にもかかわらず、古参のアフガン人医師を中心に、診療そのものは淡々と続けられている。さらに日本人ワーカー候補が次々と到着し始め、PMS基地病院の質の改善が行われようとしている。グラエ・ピーチ溪谷のオキナワ平和診療所は四月までに完成を目指している。

農業計画は、年内に試行段階を経て、次の飛躍に備えようとしている。灌漑用水整備に伴う試験農場の地味な取組みは、やがて底力を地域に与えるだろう。

アフガン情勢は、いよいよ複雑である。諸外国がアフガン問題に消極的な態度をとり始め、米軍が自ら地方の治安維持と民政への関与に引きずり込まれている。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、「東京会議で過剰な期待を持たせて、膨大な難民帰還を誘ったが、後はどうなるのか」という批判的なコメントを発している。各国NGO、国連機関は米軍の民政関与に批判的である。だが、肝心のアフガン民衆の声はどうか。実は彼らは、タリバンを受け入れた時と同様、「誰でもいいから平和にして食えるようになればよい」と考えている。「軍閥よりは外国軍の方がマシだ」という声が多くなっているのは事実である。誇り高い「耕す狼たち」も、それほど追い詰められているのだ。

一年前、ひとつの秩序を破壊した後何が来るのか、国際世論の考えが余りに浅はかだったと言わざるを得ない。早魃^{かんばつ}で逃げ出していた人々の突然の帰還で人口が増え、民心が著しく動揺し始めている。出稼ぎ失業者の群が突然村々に戻ってきたからである。そして、米軍の支援で力をつけた軍閥が、彼らに影響力を持っている。共産政権が崩壊した九二年の状態によく似ている。

事態を切実に感じる外国人は、おそらく前線の米兵たちだろう。彼らは九四年のタリバンの立場に立っていることに気づき始めている。ただタリバンと異なるのは、米兵が外国人の異教徒たちで、やがては去る行きずりの宿敵だということである。

無責任な「報復爆撃」と「アフガン復興ブーム」の結末を、今こそ率直に見るべきである。今この火急の事態で、もはや敵・味方を問わない。官・民・軍を問わない。安全と生存を保障するものなら、「誰でもよい」のだ。明日の命も分からぬ者にとっては、「反米」や「親米」も、同様にうつろなスローガンに響く。

あれほど親日的だった一般庶民の間で、少しずつ日章旗の輝きも色あせ始めている。「アフガン復興支援・東京会議」への期待感の反動である。そして、心ある人々の思いをよそに、顔のない「国際的関心」は次の標的に足早に移ってゆく。国家は広告代理店ではない。日本もまた「東京会議」によって、無責任な「顔なし」ではあり得なくなった。事態を虚心に総括すべきである。

*

*

*

この間の激変を思うと、やり切れぬ思いにとらわれる。いったい我々はどこに向かおうとしているのか。いったい誰がこの責任を取るのか。悲憤を抱えることにも疲れた。確かに私たちが関われるのは、広大なアフガニスタンのごく僅かな地域である。それでも、このような情勢であればこそ、心ある人々の真心を集めて力とし、最後まで踏みとどまって事実を見つめ、変わらぬ希望を分かち合いたいと考えている。先は長い。

(2002・12・18)